



学校教育目標 「生命(いのち)輝く子どもを育てる」
一心はほかほか、学びはしっかり、体ははつらつ



とての かふち

《学校だより》 第19号

令和5年2月15日発行
湯河原町立湯河原小学校
校長 北村和裕

2月も半ばとなり、中庭の梅も咲き始めました。今年度も残すところわずかとなり、学校に来る日は1～5年生はあと25日、6年生は23日です。限られた時間の中で、今、1～5年生は6年生を送る会に向けた準備を進めているところです。一方、6年生も「はばたき活動」や卒業式に向けた取り組みを行っています。一人ひとりが目的意識や相手意識をもって力を発揮し、お互いに心がほかほかになるような取り組みを期待しています。

今も続く「ほかほかコンサート」

今年も、ビデオ動画を活用してほかほかコンサートが行われました。子どもたちは、歌はもちろん、ダンスやサッカーのPK、手品やお手玉など、自分の得意なことを披露する様子を見ることができました。コロナ禍でなかなか人が集まったり歌ったりできない状況の中でも、工夫しながら毎年続いています。

このほかほかコンサートが行われ始めたのは、今から11年前の平成23年でした。子どもたちが自分をありのままに自由に表現できる場を作りたいという思いで、音楽・集会担当が中心になって形にしていきました。初めは、音楽好きの子が長昼休みに4階の渡り廊下のところ集まって、歌いたい子がその場で手を挙げて順番に歌っていくという方法でした。それを何度か続けていくうちに、見に来る子の数がどんどん増えていき、みんなの前で発表する子も増えていきました。グループでの発表や歌だけでなくリコーダーや簡単な合奏も登場しました。さらに発表したい子が増えていくと、事前に参加したい子を把握し、調整して2回に分けて行うということもありました。自分のやりたいこと、思いをみんなの前で発表し、集まった人たちが温かい拍手と笑顔で見守る光景は、まさにそこに集った人たちを「ほかほか」な気持ちにさせてくれるのでした。

3年前に湯河原小に再び赴任したときに、このほかほかコンサートが続いていることに驚きました。しかも、コロナ禍の中でもビデオ動画という方法で続けていることに、ほかほかコンサートに対する魅力を感じます。子どもたちにとって有意義なものは、受け継がれ、生き続けていくものなのだという事を再認識しました。



楽器の演奏をする1年生

ほかほかな心を届ける「湯河原小学校郵便局」

中休みや昼休みに2年生が忙しそうに校内を回っています。郵便はがきを回収したり、届けたりして郵便屋さんになっているからです。2月8日から郵便局が開かれましたが、その前々日の6日に、校内放送で「郵便局を開くので、心がほかほかになる手紙を書いて郵便ポストに入れてください」と全校の人たちに協力を呼びかけました。そして、各学年の廊下に郵便ポストとはがきを置き、準備完了です。郵便局が始まると、2年生は張り切って全校の人たちが書いた手紙を相手の教室に届けました。私にも書いてくれた子がいたので校長室に届けてもらい、返事を書いて郵便ポストに入れました。それを2年生が運んでくれました。

実は、2ヶ月前の12月に郵便局を開く許可を得るために、2人の代表の子が校長室を訪ねてきました。2人の話を聞いた後「なぜ、郵便局を開きたいの？」と質問すると「町探検で郵便局に行ったとき、いろいろ教えてもらって自分たちもやってみたいと思ったから」と即答してくれた時の目が輝いていました。「頑張ってるね。楽しみにしているよ」と力強く返しました。そのやる気は2人の代表の子だけでなく、2年生全体のものであることは、配達する2年生の郵便屋さんの姿を見ているとよく分かります。

手紙は、書く方も受け取る方も心がほかほかになります。また、返事を書くときもそれを受け取る時もほかほかになります。そして、その手紙を届ける人もほかほかな気持ちで届けてくれているのです。



郵便ポストを設置する2年生

「な」ではなく「ど」

子どもたちに声をかけるとき、心掛けてことがあります。「な」ではなく「ど」だということを。

若い頃こんなことがありました。授業が始まる時間なのに廊下で何人かの子がしゃがみ込んでいます。「なにしているの？」と声をかけました。その子たちは何も言わずだまっただままです。実は、展示してあった図工の作品を落として壊してしまい、どうしようかと相談していたところでした。なぜすぐに話してくれないんだと、その時は少し腹が立ちました。しかし、後で振り返ってみると「なにしているの？」の言葉は言い方が強くなり、子どもたちは自分たちが責められていると感じたのではないかと思います。他に代わる言葉はないかと思い、使い始めたのが「どうしたの？」でした。この言葉は言い方が優しくなり、相手のことを心配しているという思いも含まれています。理由を尋ねるときも「な」ではなく「ど」です。「なんでそうしたの？」「どうしてそうしたの？」この2つの言葉の言い方を比べてみると、「なんでそうしたの？」の方が言い方が強くなってしまい、相手にとっては自分が責められているという感じを与えてしまいます。

ほんのわずかな言葉の違いですが、受け取る相手の心は大きく違ってきます。相手の心が開くのか、それとも閉じてしまうのかです。子どもたちに言葉を発し続けている大人として、常に心掛けておかなければならないことだと思っています。

(その他、子どもたちの様子は学校のブログに掲載中)

<https://www.yusho.site/>